

1970年代のトルコにおける道徳教育

——宗教性の観点から——

上野 愛実

はじめに

1982年以降のトルコ共和国において、宗教教育と道徳教育は「宗教文化・道徳科 Din Kültürü ve Ahlâk Bilgisi」⁽¹⁾という名前の単一の科目のなかで、公立私立を問わず、全ての小・中学校、高校⁽²⁾で教授されている。ただし、両者は、それ以前は別々の科目、すなわち1949年以降、段階的に拡大していった選択希望制の宗教科 Din Bilgisi/Dersi と、1974年に制定された必修制の道徳科 Ahlâk Dersi のなかで教えられていた。宗教を国家が管理する体制にあるトルコにおいて、宗教教育は教育政策のなかで特に争点となりやすく、宗教科の導入や宗教文化・道徳科については教育学的な議論に加え、政治との関連を論ずる研究がこれまでもなされてきた⁽³⁾。これに対し、1974年に設置された道徳科は、宗教教育と密接な関係にありながらあまり注目されてこなかった。では、はたして宗教科と平行して施された道徳科には、宗教的な内容は含まれていなかったのだろうか。トルコと同じく、政教分離原則を掲げるフランスやカナダなどにおいて議論されたような道徳教育と宗教教育の関連性は⁽⁴⁾、トルコの道徳科の導入にあたっては取り上げられなかったのだろうか。こうした問いに答えることは、トルコ共和国における宗教と教育をめぐる政治を歴史的に理解することに資すると考えられる。こうした考えのもと、本稿では、1974年から1982年（1981-1982年度）⁽⁵⁾まで設置されていた道徳科に注目する。

これまでの宗教教育研究では、1940年代に宗教教育の再開をめぐってなされた議論や、1982年に必修科目として設置された宗教文化・道徳科が注目されてきた。後者に関しては、1980年クーデタ後の軍

事政権期に採用された「トルコ・イスラーム総合論」という、1970年に結成された、民族主義右派の知識人のグループ「知識人の炉辺」によって提唱されたイデオロギーが教科書に反映されていることや、宗教右派とされる公正発展党政権期の成立から5年後の2007年以降、国民の多数を占めるスンナ派イスラームの性格が強調されるようになったことが指摘されてきた⁽⁶⁾。こうした研究により、トルコの宗教管理体制と宗教教育の関係が明らかにされつつある。

他方、宗教文化と道徳科の前身の一つである道徳科を扱う研究は、必修科目であったにもかかわらず非常に限られている。道徳科に関しては、宗教教育を主題とするアイハンの著書のなかで、1974年設置当時の道徳科の指導要領が紹介されており⁽⁷⁾、また、同じく宗教教育研究の権威とされるビルギンの論考のなかで、当時の道徳科の実施状況に関する簡単な言及がなされているのを見ることができ⁽⁸⁾。しかし、これらを除いて道徳科を扱った研究としては、管見の限り、ケスギンの博士論文および雑誌論文と、メルテルとカルタルの共著による雑誌論文があるのみである⁽⁹⁾。ケスギンの研究では、共和国初期から2000年代までの道徳教育の内容が検討され、1970年代の道徳科に関しては、その学習指導要領の一部と教科書の記述が挙げられている。ケスギンは、同科目が「伝統、国民的価値に依拠した道徳理解」に基づいていたと論じているが⁽¹⁰⁾、彼女の研究には時代状況に即した科目の変遷を追う視点はなく、実際には様々な変化を経験した道徳科を固定的に捉えているという問題点がある。また、メルテルとカルタルの論文も、1967年から2010年までの宗教科、道徳科、宗教文化・道徳科を通して、アタテュルク主義とトルコ文化に関するテーマを指導要領から列挙するにとどまっており、道徳科が詳細に論じられているとは言えない。しかしながら、他国の事例においても、また道徳科設置前後のトルコにおいても、道徳教育は宗教教育との関連で構想されてきた。この点を鑑みれば、道徳科を宗教性あるいはその欠如の観点から論じることは、トルコの宗教教育政策、ひいては宗教管理体制のさらなる理解につながると考えられる。そこで本稿は道徳科に焦点をあて、その設置の経緯

とその後の変遷、そして教育の内容について宗教との関連から論じる。分析の主な材料には、国民教育省広報誌 *Millî Eğitim Bakanlığı Tebliğler Dergisi* と、国民教育省が出版した高校用の道徳科の教科書を用いる。

以下では、第一章で、道徳科設置以前の道徳教育の変遷を概観し、1960年代までのトルコ共和国史上、道徳教育をめぐり何が問題とされてきたのかを追う。第二章では、政治的な背景に注目しながら、道徳科の指導要領の内容と変遷を明らかにする。続く第三章では、道徳科をめぐって議論的となってきた宗教性の観点から教科書を分析する。

一．道徳教育の変遷

本章ではトルコ共和国初期から道徳科導入以前の、1920年代から1960年代までの道徳教育を二期に分けて概観する。その際に、道徳教育とかわりのある宗教教育および公民教育⁽¹¹⁾にも留意する。

1．トルコ共和国建国初期（1920-30年代）

オスマン帝国末期の道徳教育の教科書を分析したフォルトゥナは、当時新しく設立された「世俗的」とされる公立の学校における道徳教育が決して世俗的ではなく、イスラームに依拠したものとして教授されていたことを指摘している⁽¹²⁾。その後、トルコ共和国が樹立されると、翌1924年に教育指導要領が制定され、帝国末期に行われていた道徳教育に倣った「道徳・祖国科 *Musahabat-ı Ahlakiye ve Malumat-ı Vatanıye*」が実施されるようになった⁽¹³⁾。同科目は、指導要領に掲載された目的を見る限りでは宗教的な内容を含んでおらず、公民としての責務や政治を扱っていた⁽¹⁴⁾。同じく1924年指導要領において、宗教科目に関しては、小学校と中学校⁽¹⁵⁾で教えられることが定められた⁽¹⁶⁾。

2年後の1926年、指導要領が改定されると、これにより道徳・祖国科の名称が、道徳を除いた形で祖国科 *Yurt Bilgisi* へと変更された⁽¹⁷⁾。祖国科の目的は、「子どもに道徳、経済、法律、端的に言え

ば、社会に関する意味を理解させること」とされ、議会や憲法などの国家の仕組みに関する内容が教授された⁽¹⁸⁾。同じく、1926年の要領から掲載されるようになった宗教科目の目的はというと、「偉大なる神に対する感謝と愛の感情を呼び覚まし、イスラーム教を愛するように教育し、全ムスリムの信仰の調和の利益を教えること」とされた⁽¹⁹⁾。ただし、同じく1926年から宗教教育が行われる学年数と時間数は段階的に減らされていき、1939年までには全ての学校において宗教教育が行われなくなった⁽²⁰⁾。

このように、トルコ共和国初期には、道徳科目は公民教育と直接結びつけられ、教授されていた。宗教教育に関しては、オスマン帝国期の授業内容を継承する形で、イスラームに基づく宗教教育が行われていた。しかしながら、生徒の信仰心を涵養する目的で行われた宗教教育は、共和人民党政権がトルコ社会の世俗化を推進するにつれ段階的に減らされていき、1930年代末には宗教教育は学校から完全に排除された。道徳教育も、1924年から25年までと短期間でしか設けられず、その後は廃止された。

2. 宗教教育の再開、公民教育のなかの道徳教育（1940-60年代）

宗教教育廃止の後、その再開を希望する声は、はやくも1942年に農村部の教育をめぐる議論のなかで挙げられた⁽²¹⁾。そして、翌1943年の第2回国民教育諮問会議では⁽²²⁾、宗教教育および道徳教育が議題となった。結果として道徳、宗教科目の実現には至らなかったものの、祖国科に「トルコ人の道徳信条 *Türk Ahlâkının İlkeleri*」という内容が含まれることが決定された⁽²³⁾。そして、翌1944年からは、同年3月から共和人民党議員となっていたテゼル・タシユクランが執筆した『トルコ人の道徳信条』という小冊子が教科書および副教材として使用されることになった⁽²⁴⁾。『トルコ人の道徳信条』は、計14ページにまとめられており、生徒が従うべき48の項目が並べられている。第1項の出だしは、「私は健康で、力強くなるためにがんばります。なぜなら、健康な身体をもった人間は、家族、国民、そして全ての人に対して各人がもつ義務を、不健康な人に比べ、

より簡単に行えるからです」とある⁽²⁵⁾。また、「お酒を飲む人は、よく考えられず、理解できず、判断を下せず、そのために義務を行えない状態になります。……お酒は家庭を貧困に陥れます」といった記述も見られる⁽²⁶⁾。飲酒の忌避自体はイスラームを根拠とすることもできるが、この冊子では、そうした記述は見られない。この例に見られるように、この教材では宗教への言及が一切なされず、当時の世俗化政策が反映されていると言える。同教材は、1948年に祖国科の名称が公民科 Yurttaşlık bilgisi へと変更された後も継承され⁽²⁷⁾、公民科が廃止された1974年まで使用された⁽²⁸⁾。

1945年に複数政党制が導入され、1946年に民主党が結成されると、民主党は宗教教育の実施を政治的主張に含めた。1946年の選挙では共和人民党が勝利したものの、民主党の得票率は共和人民党の思惑を越えて高く、共和人民党は共和国初期の脱イスラーム化政策の変更を余儀なくされていく。一方、宗教教育に関する議論は進み、同年12月、教育省予算審議において宗教授業の再開が検討され、トルコへの共産主義の流入による影響が懸念すべき状況にあること、その対抗策として宗教教育が必要であることが説かれた⁽²⁹⁾。ただし、同1946年に開催された第3回国民教育諮問会議で道德教育について言及された際には、依然として宗教的価値にはまったく触れられなかった⁽³⁰⁾。

翌1947年に開催された共和人民党の党大会でも、宗教、世俗主義をめぐるさまざまな議題があげられ⁽³¹⁾、結果として、1949年から小学校4、5年次において希望者のみを対象とした課外の宗教授業が行われることになった。民主党が政権を獲得した1950年には、宗教科が課内授業に組み込まれ⁽³²⁾、さらに、1956年からは中学で、1967年から高校においても行われるようになった。では、この宗教科は道德教育を含んでいたのだろうか。ここではその一例として高校2年生の内容を見てみたい。高校2年生の学習指導要領には「イスラームと道德」という項目があげられており⁽³³⁾、国民教育省出版の教科書によれば、「アッラーを信じること、彼に服従することは、優れた道德の基礎であり、「良心や法律だけでは、人を悪か

ら遠ざけ、善に向かわせるには十分でなく、正しい行動をとるには宗教が必要であると説明されている⁽³⁴⁾。このように、宗教科では宗教を基礎とした道徳教育が行われていた。

以上見てきたように、1940年代以降のトルコの公教育では、公民科のなかで教授される非宗教的な道徳と、宗教科のなかに盛り込まれた宗教を軸とした道徳の、二つの対照的な道徳教育が並存していた。その後、公民科は段階的に縮小され、1974年には完全に廃止される。それでは、それと入れ替わりに導入された道徳科は、どのような性格をもつことが期待されたのだろうか。

二. 道徳科の設置過程と変遷

本章では、道徳科の設置過程とその後の指導要領の内容の変遷に迫る。まずは、時代背景とともに道徳科の設置にいたる経緯を明らかにし、次に、道徳科の指導要領を見ていく。

道徳科が導入された1970年代は、労働運動、学生運動の高まり、左右闘争の過激化や民族主義運動によるテロ活動、さらには経済危機が起きた、社会不安が大きい時代であった⁽³⁵⁾。1971年、治安の悪化を受け、軍部による圧力を受けたデミレル Demirel 首相（1924-2015年）は公正党内閣を総辞職させ、イスラームを強調するエルバカン Erbakan（1926-2011年）率いる国民秩序党も解体させられた。その後、約1年間の挙国一致内閣ののち、ほぼ2年のあいだ暫定内閣が続いた。こうした状況の後、1974年1月、エジェヴィト Ecevit（1925-2006年）率いる共和人民党が、政治的に真逆の思想を掲げる国民秩序党の後継政党、国民救済党と連立を組み、政権を獲得する。道徳科は、このエジェヴィト政権の第一期に開始された。

道徳科の設置は政権成立のために調印された連立議定書に明記され、所信表明演説のなかでも言及されていた⁽³⁶⁾。政権成立当時の新聞記事によれば、国民救済党党首であるエルバカンが道徳科の設置を望んでいたという⁽³⁷⁾。こうした政府の意向を受け、道徳科導入については複数の方面から議論がなされた。例えば、宗教右派の日刊紙ミッリー・ガゼテ *Millî Gazete* では、道徳科がフランスの道

徳科教科書の翻訳によって教えられることや哲学科教師によって教えられること、すなわち、非宗教的な形で道德教育が行われることへの懸念が述べられている⁽³⁸⁾。一方で、世俗左派のジウムフリイェト *Cumhuriyet* 紙やリベラルのミツリイェト *Milliyet* 紙では、道德科がイスラーム学院 İslâm Enstitüsü⁽³⁹⁾や導師・説教師養成学校 İmam-Hatip Okulu⁽⁴⁰⁾の卒業生によって教えられることへの反対意見⁽⁴¹⁾、道德科は知識教育に留まるべきであるなどといった主張がなされた⁽⁴²⁾。このように、道德科の設置は政治的な関心の対象とされ、道德を宗教に依拠させて教えるか、非宗教的なものとして教えるかが主な争点となった。

こうした議論が起こるなか、政権成立から半年と経たないうちに、生徒数の増加に伴う混乱を収め、また学校教育制度を再編する目的で、第9回国民教育諮問会議が開催され、そこで必修科目としての道德科の導入が決定された⁽⁴³⁾。教育諮問会議の決定は間もなく実行に移され、1974年、これまで非宗教的な道德教育を担っていた公民科の廃止と入れ替えに、道德科が設置された。道德科は、小学校4年生から高校2年生まで週1時間ずつ教えられることになった。問題となっていた担当教師はというと、小学校では担任から、あるいは「可能であれば、学校の校長」によって、中学校と高校では、「哲学、初等教育師範学校職業科、社会科、宗教科、歴史、トルコ語、文学の教師、そして校長を優先させ」ることが決定した⁽⁴⁴⁾。このように、宗教科の教師よりも哲学科や社会科の教師が先に挙げられており、前者より後者を担当教員として優先することが想定されていた。

指導要領には、科目の目的と解説、教授されるべき項目（単元）が提示されており、1974年当初の要領によれば、道德科の目的は、「慣習や私たちの伝統によって、子どもたちに国民感情に適合する道德の規則を教える」こととされた⁽⁴⁵⁾。また、解説によれば、道德科は「常に『実践』となる事柄が出发点とされなければならない」と規定された。教授されるべき事項としてあげられていたのは、人間、家庭、社会、労働、幸福、責任、哲学と道德の関係などであり、

宗教的な内容としては、小学校4年生で「私たちの宗教」という項、中学3年で「人がそのなかで生きる社会組織：宗教と道徳」という章、高校1,2年生で「宗教と道徳」項、高校1年で「道徳的、宗教的観点からの『善』と『悪』」という項が挙げられている⁽⁴⁶⁾。このように、具体的・抽象的な道徳規則、哲学や労働、責任、家族や国家といった他のテーマに比べ、宗教的内容は特に重視されていたわけではなかった。以上のことから、設置当初の道徳科は必ずしも宗教的な内容を排除したわけではなかったものの、宗教を基礎とした道徳理解ではなく、公民教育的な側面に依拠した、非宗教的な道徳に重点が置かれていたと理解することができる。

しかしながら、1974年11月、エジェヴィト政権が連立の不一致により成立から10ヶ月で総辞職すると、翌1975年、早くも道徳科の指導要領に改訂が加えられた⁽⁴⁷⁾。連立の解消は、単独で政権を獲得するためにエジェヴィト自らが行った政略であったが、結果としてエジェヴィトの思惑通りにはいかず、デミレルが公正党、国民救済党、民族主義者行動党、共和信頼党の4党を集め、政権を成立させることになった⁽⁴⁸⁾。そして、政権成立から約半年後の1975年9月、道徳科の教育内容を改訂することが決定された⁽⁴⁹⁾。科目の目的は1974年設置時とほぼ同じであるものの⁽⁵⁰⁾、その解説には部分的に、しかしながら重要な変更がなされた。最も目立つ変更点として、第1項の第一文を挙げることができる。

イスラーム道徳理解においても示されるように、「実践哲学、すなわち実践道徳の相互に関連しあう利益と発展の狙いが、ただ抽象的な科学でないこと、そして、何よりも実践でもって完成させること、振る舞いをよいものにするという意味をもつこと、すなわち科学という木が実践の実をみのらせることがなければ、(道徳科は)尊厳の枠外に」留まってしまうという考えに注意して、道徳科の実施においては常に「実践」となる事柄が出发点とされなければならない⁽⁵¹⁾(引用の鉤括弧は原文通り。丸括弧内は筆者)。

この引用のうち、冒頭から「注意して」までの部分は、1975年の要

領で付け加えられたものである。解説部の変更と同時に、高校1年生向けの教育内容として、1974年の指導要領では一つの節として設けられていた「道徳と宗教」が、1975年のものでは同じ名称のまま章に格上げされている。増加したとはいえ、章構成の面で宗教に関わる内容の割合は依然として限られていたものの、より重要な変更は中学および高校の担当教師に関する規定に見られた。1975年要領では、道徳科の担当教師の規定が「神学部、イスラーム学部 İslamî İlimler Fakültesi⁽⁵²⁾、高等イスラーム学院、導師・説教師養成高校を卒業した教員」へと大幅に変更され⁽⁵³⁾、世俗左派の人々の懸念がまさに現実のこととなったのを見ることができる。

管見の限り、小学校と中学校に関しては1975年指導要領以降、1982年の廃止までその内容に変更はなされていないようであるが、高校に関しては1976年に再び変更がなされ、高校3年生にまで道徳科が設けられるようになった。この変更は高校指導要領全体の改訂に伴ったものであり、道徳科の目的と解説は1975年のものと同様のままで、その内容にも大きな変更はない。加えて同じ1976年には、それまで行われていなかった中学および高校の各3年次においても選択希望制の宗教科が設置されるようになるなど⁽⁵⁴⁾、宗教教育の拡大の動きが見られた。このことから、1976年になされた道徳科の改訂は、宗教教育の拡大を推進する動向のなかでなされたものと考えることができる。

しかしながら、この改訂の2年後、1978年に再び高校のみに関して道徳科の指導要領が改訂された。これまでと同様、その背景には新たな政権の発足があった。1978年1月にエジェヴィトが単独で政権を獲得すると、その4ヶ月後の5月、デミレル政権のもとで制定された高校の道徳科指導要領が撤廃され、さらに1977年度の残りの期間に関して、高校における道徳科の授業免除および試験の停止が決定された⁽⁵⁵⁾。教育省広報誌によれば、1976年の高校道徳科指導要領の撤廃は、行政裁判所において、高校3年生用のある道徳科教科書をめぐって訴えが起こされたことに伴ってなされたという⁽⁵⁶⁾。裁判の経緯や教科書のどのような記述が問題とされたのかなどの詳

細は不明であり、この決定の時点では判決は下されていなかったが、同じ執筆陣による高校1, 2年生および中学1～3年生用の教科書の使用も不認可とされた⁽⁵⁷⁾。

その5ヶ月後の1978年10月、改めて1974年版の指導要領に立ち返った道徳科が実施されることが決定された。1978年のこの指導要領では新たに、「アタテュルクの言葉に見る道徳的価値」という内容が設けられた⁽⁵⁸⁾。また、1976年の指導要領で4節構成の章へと格上げされた「宗教と道徳」章に関して、1978年要領では2節構成へと分量が減らされている⁽⁵⁹⁾。このような、世俗主義の象徴的な存在としてのアタテュルクに関する記述の登場や宗教に関連する項目の減少は、共和人民党のエジェヴィトによる公正党や国民救済党への対抗策として捉えることができる。

これに対し、翌1979年に成立したデミレル政権期においては、1980年に、小学校の道徳科および宗教科の教師には導師・説教師養成学校卒業者が優先され、それ以外の教師が道徳科、宗教科を教える際には、教育省が開催する教室に参加し、そこで実施される試験に合格することを担当の要件とすることが決定された⁽⁶⁰⁾。

以上見てきたように、科目の設置の1年後から、政権の変化によりその内容にも変更が加えられ続けたためか、道徳科の実施状況は安定していたとは言いがたく、国民教育省は複数回にわたり、規定以外の教師が道徳科を教えることのないよう注意をしなければならなかった⁽⁶¹⁾。小学校と中学校の道徳科指導要領に限っては、どの項目を選択・重視するか、また扱わないかは、教師側の裁量次第で決めてよいことが記されており⁽⁶²⁾、それゆえに誰がこの科目を担当するかは重要な問題であった。一般的に、トルコの学習指導要領の拘束力は強く、そのことは、教育省出版による教科書と民間出版社による教科書の差違が少ないことにも示されている⁽⁶³⁾。しかしながら、道徳科に限っては担当者側の選択に任される部分が多く、道徳科の特異さが表れていると言える。

さらに、ここで確認しておくべき点は、1974年に道徳科の導入が実現され、その指導要領が告知されたものの、同年内にはまだ国民

教育省の認可を経た教科書は出版されていなかったという事実である⁽⁶⁴⁾。加えて、エジェヴィト政権期になされた1978年の改訂以降、認可を受けた高校用の道徳科教科書は科目の廃止までついで出版されなかったことも確認できた⁽⁶⁵⁾。このような状況のなか、担当教師に対する規定と実際の状況に齟齬がある場合があったように、教科書についても公的なものとそうでないものが並存しており、教育省は認可を得ていない教材が出回っていたことを受けて、その使用に関する注意を複数回にわたって行っていた⁽⁶⁶⁾。また、認可の有無を問わず、道徳科の教材として書かれた出版物のなかには、哲学科教師が書いたものや⁽⁶⁷⁾、著名な宗教派知識人であるヌーレッティン・トプチュが書いたものなどもあり⁽⁶⁸⁾、こうした出版物の比較からは、教育関係者が想定する道徳理解の幅の広さを見ることができる。当時、高校で宗教科の調査を行っていたビルギンは、教師たち、また学校の監督者たちも、道徳科を「哲学か、社会学か心理学か、あるいは宗教の授業に依拠したものとして」教えるべきかどうかかわからず、教師によって教え方が異なっていたと述懐している⁽⁶⁹⁾。このような記述からは、教師たちもまた、道徳科を教授する際に道徳の根拠を問題としていたことがうかがえる。

以上から明らかかなように、道徳科の導入はその当初から政治的な議論を引き起こしており、政権の変化により複数回にわたり、宗教的な内容をめぐって変更がなされていた。そうしたなか、道徳科の指導要領の度重なる変更とともに、各人の主義主張により複数の道徳理解が並列され、教育現場に混乱が生じていただけでなく、教育省自体が改訂・変更を追いつけていないという状況が起きていた。おそらくは、こうした不安定な状態が続いていたために、これまでの研究においても道徳科に関する議論や理解が深められてこなかったと考えることができる。

三. 道徳科教科書

以上で見てきたように、道徳科において争点となってきたのは、道徳教育のなかに宗教を含めるかどうか、含めるとしたら、どの程

度、どのように表出させるかという点であった。そこで以下では、実際に出版された認可済みの道徳科の教科書に、どのような形で宗教的な内容が盛り込まれていたのかを明らかにする。そのために、最も宗教的な内容が強く表れていると考えられる、1976年指導要領に則った教科書を用いる。なかでも、国民教育省が1976年に刊行した高校3年生用の教科書を取り上げる。前述のようにこの教科書は、1976年道徳科学習指導要領が撤廃される要因となったものである。本章では、以下で扱う高校3年生の教科書の概要を説明した後に教科書の分析を行う。

1. 教科書概要

本章で対象とする教科書は、1976年に国民教育省によって出版され、エロル・ギュンギョル、エミン・ウシュク、アフメト・テキン、ヤシャル・エロルの4名により執筆されている⁽⁷⁰⁾。当時イスタンブール大学准教授であったエロル・ギュンギョルは、1970、80年代に活躍した社会心理学者で、ナショナリストとして知られる著名な著述家である。神秘主義教団の長（シャイフ）の孫でもあり、1975年に出版された『トルコ文化とナショナリズム』という著書に見られるように⁽⁷¹⁾、イスラームと近代化やナショナリズムに関する議論を行っている。エミン・ウシュクは導師・説教師養成学校で教員をした後、高等イスラーム学院で学び、教鞭を取っていた。アフメト・テキンは公法、クルアーン解釈学、ハディースの専門家であり、もう一人の著者であるヤシャル・エロルとともに、1971年にハディースの翻訳を出版している。後三者を見る限り、当時の国民教育省は道徳科の教科書執筆に宗教的な知識の必要性を見ていたと考えられる。

この教科書は全160ページ、章は全てで18あり、社会生活、経済生活、宗教、公正、法律、国民生活、民主主義、戦争、機械文明とそれぞれの道徳との関係が章毎に扱われている。加えて、慣習や伝統、家庭、結婚といったテーマも章題となっていることから、指導要領の解説のなかで「実践」という言葉が強調されていたように、

実際の生活に関わる事柄が取り上げられていることが確認できる。

2. 教科書に見る宗教性

本節では、道徳科に宗教的な内容がどのように含まれていたのか、道徳と宗教がどのような関係をもつものとして描かれていたのかに注目して教科書を見ていく。ここでは、そうした記述が最も多く見られると考えられる「宗教と道徳」章と、それ以外の章の2つに分けて見ていく。

a. 「宗教と道徳」章

「宗教と道徳」章では、まず、道徳と宗教との関係や、両者の狙いが同一であることについての記述が見られる。さらに、宗教が「道徳と同程度、あるいはそれ以上」に社会管理の機能が強いことが客観的な事実として説明されている箇所も見られ⁽⁷²⁾、宗教の優位性が示唆されていると捉えることができる。この章ではイスラームに限らない複数の宗教が想定され、「すべての宗教は道徳に関する命令と禁止を設けており、どのような宗教も道徳に関する義務を行うことに対して無関心ではない」⁽⁷³⁾と両者の関係が述べられている。この教科書には宗教を普遍的なものとするこうした記述がある一方、基本的にイスラームを強調する説明がより多く見られる。例えば、イスラームの義務の一つである1日5回の礼拝が取り上げられ、こうした宗教的行動が「人間の意志を強くする目標をもっている」と述べられている⁽⁷⁴⁾。

宗教と道徳の関係については、「社会生活における宗教と道徳の一体化」という節で以下のように説明される。

神 Tanrı を愛する者は、彼の創造したものも愛さなければならぬ。ユヌスが、「私たちは創られた者を愛します、創った者よりも」と言ったように、神 Tanrı への愛は、……道徳的になることを必要とする⁽⁷⁵⁾。

この文章では、信仰心をもつことが、道徳的な人間となることにつながるということが明確に示されている。ここで挙げられているユヌスとは13、14世紀の著名なトルコ系イスラーム神秘主義者ユヌス・エム

レであり、メヴラーナーのような他のトルコ系神秘主義者とともに、この教科書内で複数回言及されている⁽⁷⁶⁾。また、トルコ系神秘主義者に関する同様の記述は、高校1年生と2年生の国民教育省出版の教科書においても見られる⁽⁷⁷⁾。

さらに、上記の文章で注目されるのは、神を表記する際にトルコで通常使用されるアラビア語起源の「アッラー」ではなく、「タンル Tanrı」というテュルク語系の単語が選択されていることである。この教科書においては、アッラーの語も見られるものの、タンルがより多く使用されている。オスマン帝国末期の思想家であるズィヤ・ギョカルプ以来の、イスラームをトルコ・ナショナリズムに適合させた形で変革することを目指す潮流を受けて、共和国初期においてはクルアーンやモスクで行われる説教、礼拝の呼びかけであるアザーンの言語をアラビア語からトルコ語に置き換える動きが見られた。そして、そのなかではアッラーに代えてタンルが用いられることもあった⁽⁷⁸⁾。本教科書の第一執筆者であるギュンギョルは、ギョカルプに傾倒していたことが知られており⁽⁷⁹⁾、前述の著書においてもタンルという語を積極的に使用していた⁽⁸⁰⁾。これらに鑑みれば、道徳科教科書に見られるタンルという語の選択にも、ギョカルプ以来の思想潮流が影響していると考えられるのである。

b. その他の章における宗教性の表れ

道徳科の教科書では、宗教に特化した上述の章以外でも宗教に関する記述がしばしば見られる。そこでは、イスラームの命令や預言者ムハンマド、また上であげたような神秘主義者たちの言葉が引用され、道徳的な行動をとることの根拠が説明される⁽⁸¹⁾。

神秘主義者の出自が示しているように、こうした宗教的な内容はしばしばトルコ性との関連のなかで説明される。例えば、「家族の炉辺」章には以下のような記述がある。

トルコ人がイスラームを受け入れた後、家族の炉辺はさらに神聖さを獲得することになった。父母への敬意、兄弟への愛は、伝統、また宗教の命令となった。世帯の持ち主となることは、伝統の命令であると同時に、アッラーの命令であるとも信じら

れた⁽⁸²⁾。

この文章では、トルコ人の伝統とイスラームの命令が同一のものであったことが客観的な事実として説明されており、トルコ性との関連のなかでイスラームの教えが正当性を持つものとして記述されている。

家族に関する章に加え、「国民生活と道徳」章でも同様の記述が見られる。例えば、同章のなかの「国家 Devlet」節では、トルコ人の国家の特徴的な性格の一つに公正 adalet が挙げられ、以下のように説明されている。

社会奉仕とともに、公正もトルコ国家の最も際だった特徴の一つである。裁判では貧者とパーディシャー（君主、帝王）が平等に扱われ、何者も特権を有していなかった。イスラーム教の公正についての命令を最もよく実行していたのは、まずもってトルコ人だった。（トルコ人は）国家のすべての義務を果たしたためか、それ（国家）に対して大きなつながりが生まれ、アッラーの道において死ぬことと国家の道において死ぬことが同一と見なされた。……オスマン帝国において法を代表するシェイヒュルイスラームにはパーディシャー（の決定）を却下する力さえあり、このような力、つまり政治的権威の法的手段による完全な管理は、どの外国においても見られたことではない⁽⁸³⁾（丸括弧内は筆者）。

この記述では、「トルコ国家」、すなわちオスマン帝国の司法制度が他国と比べ、公正の観点から優れていたことが強調されており、そうした性格がイスラームの原則に結びつけて描かれている。さらに、上記とほとんど同じことが「民主主義と道徳」章でも繰り返されており⁽⁸⁴⁾、必ずしも宗教とは直接的に関係のない章においても、トルコ人、トルコ国家の特徴とされるものとイスラームの教えが同一であることが強調されている。

こうしたトルコ性とイスラームの同一視は、以下の文章にも見られる。

トルコ国民の個々人は、歴史上彼らがつくってきた国家機構を

通じて、つねに国家と一体化してきた。……私たち国民にとって愛国心とは、宗教への愛のように、力強く、根深く、神聖である。毎日5回の礼拝のあと、「アッラーよ、国家に、国民に消滅をもたらさないで下さい!」と、祈りがなされる。宗教と国家は、神 Tanrı がその僕に与えた最も偉大な二つの恵みである⁽⁸⁵⁾。

この文章では宗教と国家が並列され、両者が同等の神聖性を有するものとして描かれている。ここで記述されている礼拝のあとの祈りは、トルコにおいては慣用表現としてしばしば行われる祈りであり、イスラーム主義とトルコ・ナショナリズムの融合を示す表現として知られる⁽⁸⁶⁾。このように、道徳科の教科書においては、トルコ共和国やトルコ人とイスラームの調和を示す記述が繰り返されている。

以上で見てきたように、道徳科の教科書では、トルコ性とイスラームの結びつきが強調されており、これは、当時草創期にあったトルコ・イスラーム総合論に合致していると見ることができる。カプランは、道徳科の廃止とともに設置された宗教文化・道徳科の教科書ではイスラームが「トルコ人の文化的本質」として描かれていると論じている⁽⁸⁷⁾。同氏によれば、宗教文化・道徳科の教科書には、国家を守ることがトルコ人の「生来の気質」であり、「イスラームもまた祖国のために闘うことを常に命じ」ていること、キリスト教など他の宗教は「トルコ人の戦争に対する精神に適合しなかった」という記述があるという⁽⁸⁸⁾。トルコ人の性質とイスラームの教えが共通であることを示すこうした記述は、道徳科の教科書において見られた、トルコ性とイスラームの結びつきを説く記述と類似している。このように、宗教文化・道徳科に見られたトルコ・イスラーム総合論の特徴は、それ以前の道徳科においてすでに見られていたのである。

おわりに

本稿では、これまで明らかにされてこなかった1970年代の道徳科

の導入とその後の変遷を検討した。それによって、道徳科は、特に宗教性をめぐりその内容に変更が加えられてきたことが明らかになった。そうした変化が政権の交代とともになされてきたことから、道徳科が為政者にとって自分たちの主張を行う政治的なアピールの場として存在しており、そこで争点となったのが、道徳を教える際に宗教的な内容を含ませるかどうかという点だったことを見ることができる。こうしたなかで作成された教科書の読解を通じて、道徳科では、イスラームを根拠とした道徳が説かれると同時に、その際に、トルコ性との結びつきを強調することで、公の場でのイスラームの表出を望まない人々にとっても、より受け入れやすい形でイスラームを描くという試みがなされていたのを見ることができた。

1980年クーデタ後の軍事政権下で導入された宗教文化・道徳科に関するこれまでの研究は、同科目にトルコ・イスラーム総合論が反映されていることを強調してきたが⁽⁸⁹⁾、上のような道徳科教科書の記述からは、宗教文化・道徳科の前身にあたる道徳科においても同様の方向性がすでに見られていたことがわかる。教科書の執筆者のなかで中心的な存在であったエロル・ギュンギョルは、当時トルコ・イスラーム総合論を提唱した「知識人の炉辺」の中心メンバーと同じ大学に在籍しており、彼がギョカルプの影響を受けていたことから、トルコ・イスラーム総合論を受け入れやすい状態にあったことがうかがえる。このように、こうした思想潮流の影響は、軍部によって宗教教育に反映させられる以前から道徳科のなかに表出していたのであり、このことは、後の宗教文化・道徳科の特徴と見られるトルコ・イスラーム総合論の性格が、実はそれ以前の道徳科から受け継がれたものでもあったことを示している。これはすなわち、クーデタという際だった政変後の教育政策に関してであっても、それ以前との連続性にも留意して検討すべきであることを意味している。さらに、こうした動きは道徳教育に限られたことではなかった。1931年から1993年までの歴史科教科書を分析したコポーによれば、1976年に出版された教科書においてもすでにトルコ・イスラーム総合論の萌芽が見られていたという。この教科書はギュンギョル

らが執筆した道徳科教科書と同様、1978年までと短いあいだでしか使用されなかったが、コポーは、この教科書が1980年クーデタ後の教科書の原型となったことを指摘している⁽⁹⁰⁾。このように、本稿で明らかにした道徳科と宗教文化・道徳科の連続性は、教育をめぐる政治というより大きな流れのなかに位置づけることができる。

今後の課題としては、宗教文化・道徳科のもう一つの前身である宗教科をトルコ・イスラーム総合論の観点から検討することがあげられる。

註

(1) 本稿では以下で示すように、宗教文化・道徳科以外にも、「～・(と ve)～」という名称の科目がある。これらを日本語訳するにあたり、どこからどこまでが科目名であることを示すために、初出の場合のみ鉤括弧を付ける。また、科目の名称には、語尾に科 *bilgi, ders* が付くものとそうでないものがあるが、引用文中以外では科目であることを示すために、これらの語がついていない科目にも「科」を付ける。

(2) 本稿で研究対象としている1970年代に関しては、1973年の教育基本法の施行以降、初等教育（基礎教育）に位置づけられる小学校は5年制、中学校は3年制であり、中等教育とされる高校は3年制である（それ以前は、中学校は中等教育とされていた）。教育省の通達によれば、義務教育期間は、教育基本法の制定により小学校と中学校となった。しかしながら、この法律の効果が得られなかったためか、その後、1983年になされた教育基本法の改正により義務教育期間は小学校のみへと、1973年以前の状態へ戻された。T. C. *Resmî Gazete*, no. 10705, 1961/01/12, 3068-3069; no. 14674, 1973/06/24, 2-3; no. 18081, 1983/06/18, 8; *Millî Eğitim Bakanlığı Tebliğler Dergisi*, no. 1753, 1973/07/23, 308, 310; Hasan Cicioğlu, *Türkiye Cumhuriyetinde İlk ve Ortaöğretim (Tarihi Gelişimi)*, Ankara: Ankara Üniversitesi Basımevi, 1983, 27, 77, 131.

(3) Sam Kaplan, “*Din-u Devlet All Over Again?: The Politics of Military Secularism and Religious Militarism in Turkey Following the 1980 Coup,*” *International Journal of Middle East Studies* 34(1): 2002, 113-127; Buket Türkmen,

- “A Transformed Kemalist Islam or a New Islamic Civic Morality?: A Study of ‘Religious Culture and Morality’ Textbooks in the Turkish High School Curricula,” *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 29 (3): 2009, 381-397; 新井政美編著『イスラムと近代化：共和国トルコの苦闘』講談社，2013，114-119，186-193.
- (4) 例えば以下を参照。伊達聖伸『ライシテ，道徳，宗教学：もうひとつの19世紀フランス宗教史』勁草書房，2010；伊達聖伸「宗教を伝達する学校：ケベックのライシテと道徳・倫理・文化・スピリチュアリティ」『宗教研究』85(2): 2011, 243-268.
- (5) トルコの教育年度は9月始まりである。本稿では教育年度ではなく，年をそのまま記すこととする。
- (6) Kaplan, “*Din-u Devlet*,” 113-127; Türkmen, “A Transformed Kemalist,” 381-397.
- (7) Halis Ayhan, *Türkiye’de Din Eğitimi*, İstanbul: DEM Yayınları, 2004, 231-234.
- (8) Beyza Bilgin, “1980 Sonrası Türkiye’de Din Kültürü ve Ahlâk Bilgisi Dersinin Zorunlu Oluşu ve Program Anlayışları,” in *Din Öğretiminde Yeni Yöntem Arayışları Uluslararası Sempozyum Bildiri ve Tartışmalar 28-30 Mart 2001*, Ankara: MEB Din Öğretimi Genel Müdürlüğü, 2003, 674.
- (9) Safiye Kesgin, “Cumhuriyet Dönemi Örgün Eğitim Kurumlarında Ahlak Eğitimi,” Ankara University, Ph. D. Thesis, 2010, 110-111, 140-153; Kesgin, “Cumhuriyet Dönemi Örgün Eğitim Kurumlarında Ahlak Eğitimi,” *Ankara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi Dergisi* 52(1): 2011, 209-238; Feridun Merter and Şefik Kartal, “1967’den Günümüze Lise Din Kültürü ve Ahlak Bilgisi Dersleri Öğretim Programlarında Atatürkçülük ve Türk Kültürü Konuları,” *Mehmet Akif Ersoy Üniversitesi Eğitim Fakültesi Dergisi* 28: 2013, 6-10.
- (10) Kesgin, “Cumhuriyet Dönemi Örgün,” 153.
- (11) トルコには，以下で登場する道徳・祖国科，祖国科，公民科のように，公民としての資質を涵養することを主眼とした科目があり，これらの科目は政治制度などに関する知識に加え，時代により道徳教育の内容を含むことがあった。本稿ではこれらを公民教育と総称する。公民教育の定

義については以下を参照。高橋勝「公民教育」教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房、2000、281-283。

- (12) Benjamin C. Fortna, "Islamic Morality in Late Ottoman 'Secular' Schools," *International Journal of Middle East Studies* 32(3): 2000, 380-389.
- (13) この科目では、小学校の1年生から3年生まで道徳教育、4、5年生で公民教育が行われていた。Erdal Aslan, "Türkiye Cumhuriyeti'nin İlkokullarda İzlediği İlk Öğretim Programı: '1924 İlk Mektepler Müfredat Programı'," *İlköğretim Online* 10(2): 2011, 728.
- (14) Aslan, "Türkiye Cumhuriyeti'nin," 728-730.
- (15) 当時は「高校第一段階 lise birinci kademe」と呼ばれていた。
- (16) Recai Doğan, "1980'e kadar Türkiye'de Din Öğretimi Program Anlayışları (1924-1980)," in *Din Öğretiminde Yeni Yöntem Arayışları*, 614. 高校では道徳科や宗教科は設けられていない。Türkiye Cumhuriyeti Maarif Vekaleti, *Liselerin İkinci Devre Müfredat Programı*, İstanbul: Matbaa-i Amire, 1340 (1924), 3.
- (17) 小学校4、5年次に設けられた。Lütfi Budak and Çiğdem Budak, "Osmanlı İmparatorluğu'ndan Türkiye Cumhuriyeti'ne İlkokul Programları (1870-1936)," *Uluslararası Türkçe Edebiyat Kültür Eğitim Dergisi* 3(1): 2014, 387.
- (18) Füsun Üstel, "*Makbul Vatandaş'ın Peşinde: II Meşrutiyetten Bugüne Vatandaşlık Eğitimi*," İstanbul: İletişim Yayınları, 2004, 132-133.
- (19) Doğan, "1980'e kadar Türkiye'de," 615.
- (20) 1926年までは小学校2年生から5年生まで週に2時間教えられていた宗教の授業が、3年生から5年生までと縮小され、時間も各週1時間に減少、翌1927年からは、中学校の宗教科は課外 program dışı となり、必修ではなく希望者のみが受講することになった。1930年には、小学校の宗教科も課外になり、1931年以降は、都市部の小・中学校および師範学校において、宗教に関する授業は課内・課外問わず行われなくなった。一方、農村小学校では、1927年の改訂により宗教授業が課内とされたが、その後1930年に課外になり、都市部に続き、1939年までに廃止された。Recai Doğan, "Cumhuriyetin İlk Yıllarında Tevhid-i Tedrisat Çerçevesinde Din

- Eğitim-Öğretimi ve Yapılan Tartışmalar,” in *Cumhuriyet’in 75. Yılında Türkiye’de Din Eğitimi ve Öğretimi İlmî Toplantısı (İzmir, 4-6 Aralık 1998)*, 1999, 274; Doğan, “1980’e kadar Türkiye’de,” 616-617.
- (21) 新井編著『イスラムと近代化』106-107.
- (22) 国民教育諮問会議 Millî Eğitim Şûrası は、国民教育省による諮問機関であり、開催は4年に一度とされているが、教育相は必要に応じて随時会議を開くことができる。*Tebliğler Dergisi*, no. 2439, 1995/09/25, 733-738.
- (23) T. C. Maarif Vekilliği, *İkinci Maarif Şûrası 15-21 Şubat 1943 Çalışma Programı, Komisyon, Raporlar, Konuşmalar*, 1943, 104-117, 190-193; Üstel, “*Makbul Vatandaş’ın Peşinde*,” 173-174. 公民科は当初、小学校4, 5年, 中学校1～3年次に設置された。
- (24) テゼル・タシユ克蘭は政治家アフメト・アアオールの子で、現イスタンブール大学の前身であるダーリユルヒュスーンの文学部哲学科で学んだ後、高校の教員をしていた。
- (25) Tezer Taşkıran, *Türk Ahlakının İlkeleri*, İstanbul: Maarif Matbaası, 1943, 1.
- (26) Taşkıran, *Türk Ahlakının İlkeleri*, 4.
- (27) Üstel, “*Makbul Vatandaş’ın Peşinde*,” 242.
- (28) 小学校において公民科は1972年に廃止された。中学校1～3年生では1974年の廃止まで教授された。*Tebliğler Dergisi*, no. 1658, 1971/05/24, 169-185; no. 1698, 1972/05/15, 87-88; no. 1729, 1973/01/15, 17; no. 1840, 1973/04/02, 121.
- (29) 新井編著『イスラムと近代化』112-116.
- (30) T. C. Millî Eğitim Bakanlığı, *Üçüncü Millî Eğitim Şûrası 2-10 Aralık 1946 Çalışma Programı, Komisyon, Raporlar, Konuşmalar*, s. 1.: Millî Eğitim Bakanlığı Yayınları, 1947, 54-56.
- (31) 新井編著『イスラムと近代化』116-117.
- (32) *Tebliğler Dergisi*, no. 617, 1950/11/20, 116.
- (33) *Tebliğler Dergisi*, no. 1475, 1967/10/23, 372.
- (34) Süleyman Ateş, Orhan Karmış, and Süleyman Hayri Bolay, *Liseler için Din Bilgisi 2. Sınıf*, İstanbul: Millî Eğitim Basımevi, 1977, 72.
- (35) 新井政美『トルコ近現代史：イスラム国家から国民国家へ』みすず書

- 房, 2001, 269-274, 276-280; 新井編著『イスラムと近代化』166-167, 174-177.
- (36) I. Ecevit Hükümeti Koalisyon Protokolü (CHP-MSP). (<https://www.tbmm.gov.tr/hukümetler/KP37.htm>); I. Ecevit Hükümeti Programı.(1974/01/26)(<https://www.tbmm.gov.tr/hukümetler/HP37.htm>) (2017/04/25最終閲覧)
- (37) “MSP Ankara İl Kongresine Erbakan, MSP’li Bakanlar ile İl başkanları Katıldı: Çocuklarımıza Okullarda Millî Ahlâk Öğreteceğiz,” *Millî Gazete*, 1974/05/06.
- (38) Mustafa Kelebek, “Millî Ahlâk Dersleri üzerine,” *Millî Gazete*, 1974/04/05.
- (39) イスラームに関する研究者, 教育者, 宗教的職能者を養成する目的で, 1950年代末より設立された公立の高等教育機関。1982年に廃止され, 大学の神学部へ改組された。
- (40) 1951年より開校した, 宗教的職能者を養成するための, 中学・高校に相当する教育機関。
- (41) Hıfzı Veldet Velidedeoğlu, “Eğitimde Asıl Tehlike,” *Cumhuriyet*, 1974/06/09.
- (42) Halil Tekin, “Nasıl Bir Ahlâk Dersi?,” *Milliyet*, 1974/03/08.
- (43) IX. Millî Eğitim Şûrası. (http://ttkb.meb.gov.tr/meb_iys_dosyalar/2014_10/02113442_9_sura.pdf) (2017/04/25最終閲覧)
- (44) *Tebliğler Dergisi*, no. 1803, 1974/09/02, 333.
- (45) *Tebliğler Dergisi*, no. 1798, 1974/07/22, 301.
- (46) *Tebliğler Dergisi*, no. 1798, 302-308.
- (47) *Tebliğler Dergisi*, no. 1853, 1975/09/08, 393.
- (48) 新井『トルコ近現代史』275-276.
- (49) *Tebliğler Dergisi*, no. 1853, 393.
- (50) 科目の目的で異なる点は, 1974年版の目的の7番「今日まで続く, 常に議論されてきたテーマである道徳の理解を知ることに関して助けとなること」が, 1975年版では, 道徳の前に「世界と」という言葉が書き加えられているのみであった。*Tebliğler Dergisi*, no. 1853, 393-394.
- (51) *Tebliğler Dergisi*, no. 1853, 394.
- (52) イスラームに関する学問を専門とする学部。1982年に神学部へ改組さ

- れた。
- (53) *Tebliğler Dergisi*, no. 1856, 1975/09/29, 426-427.
- (54) *Tebliğler Dergisi*, no. 1900, 1976/09/27, 325-340. また、管見の限りでは、道徳科と異なり、宗教科に関しては設置当初から廃止まで、教育内容に関しての大きな変更は見られない。
- (55) *Tebliğler Dergisi*, no. 1989, 1978/06/12, 305.
- (56) *Tebliğler Dergisi*, no. 1989, 305.
- (57) *Tebliğler Dergisi*, no. 1989, 305.
- (58) *Tebliğler Dergisi*, no. 2003, 1978/10/16, 455-456.
- (59) *Tebliğler Dergisi*, no. 1900, 336; no. 2003, 456.
- (60) この決定は9月29日発行の教育省広報誌に掲載されているが、デミレル内閣の教育相オルハン・ジェマル・エルソイのサインが付されているため、9月12日のクータ以前になされたものだと考えられる。*Tebliğler Dergisi*, no. 2071, 1980/09/29, 205-206.
- (61) *Tebliğler Dergisi*, no. 1858, 1975/10/27, 438; no. 1862, 1975/12/01, 461-462; no. 1912, 1976/12/20, 483.
- (62) *Tebliğler Dergisi*, no. 1798, 302, 304; no. 1853, 395, 398.
- (63) コポーは、歴史科の教科書の内容にも出版社の違いによる差がほとんど見られず、それは、教科書出版のために教育省管轄の教育審議会 *Talim ve Terbiye Kurulu* の認可が必要であるためだとしている。Etienne Copeaux, *Tarih Ders Kitaplarında (1931-1993) Türk Tarih Tezinden Türk-İslam Sentezine*, İstanbul: Tarih Vakıf Yurt Yayınları (tr. Ali Berktay), 1998, 80.
- (64) 1974年に教科書の形をとって刊行された出版物は、教育省の認可を得ていない。例えば、*Ortaokullar için Ahlâk Dersleri Kitabı 2*, Ankara: Kurtuluş Ofset Matbaası, 1974.
- (65) 教育省広報誌に掲載された指定教材一覧を参照した。*Tebliğler Dergisi*, no.1987, 1978/05/29; no. 1993, 1978/07/31; no. 2029, 1979/04/23; no. 2061, 1980/05/12; no. 2083, 1981/03/30.
- (66) *Tebliğler Dergisi*, no. 1858, 438; no. 1912, 483.
- (67) Kemal Ertürk, *Ahlâk Lise 2*, Ankara: Varol Matbaası, 1974.
- (68) Nurettin Topçu, Emin Işık, Yaşar Erol, and Ahmet Tekin, *Ahlâk Lise 1*,

İstanbul: Kalem Yayınevi, 1976.

一九七〇年代のトルコにおける道徳教育

- (69) Bilgin, “1980 Sonrası Türkiye’de,” 674.
- (70) Erol Güngör, Emin Işık, Ahmet Tekin, and Yaşar Erol, *Ahlâk Lise 3*, [İstanbul]: Devlet Kitapları, 1974. 出版地の記載はなく、この教科書の版権が国民教育省にあることが明記されている。
- (71) Erol Güngör, *Türk Kültürü ve Milliyetçilik*, İstanbul: Ötüken Yayınevi, 1975.
- (72) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 42.
- (73) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 39.
- (74) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 40-41.
- (75) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 42-43.
- (76) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 15, 17, 19, 41.
- (77) Erol Güngör, Emin Işık, Ahmet Tekin, and Yaşar Erol, *Ahlâk Lise 1*, İstanbul: Millî Eğitim Basımevi, 1976, 13, 39, 44; Erol Güngör and Emin Işık, *Ahlâk Lise 2*, İstanbul: Millî Eğitim Basımevi, 1977, 40, 42, 61-63, 120-121.
- (78) Umut Azak, *Islam and Secularism in Turkey: Kemalism, Religion, and the Nation State*, London: I. B. Tauris, 2010, 45-60.
- (79) Ahmet Yılmaz, “Erol Güngör,” in Tanıl Bora (ed.), *Milliyetçilik*, İstanbul: İletişim Yayınları, 2002, 650.
- (80) Güngör, *Türk Kültürü ve Milliyetçilik*.
- (81) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 15-16, 18.
- (82) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 100.
- (83) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 123.
- (84) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 131-132.
- (85) Güngör, *Ahlâk Lise 3*, 126.
- (86) Birol Akgün and Şaban H. Çalış, “Tanrı Dağı Kadar Türk, Hıra Dağı Kadar Müslüman: Türk Milliyetçiliğinin Terkibinde İslâmcı Doz,” in Tanıl Bora (ed.), *Milliyetçilik*, 595.
- (87) Kaplan, “*Din-u Devlet*,” 120.
- (88) Kaplan, “*Din-u Devlet*,” 120.
- (89) Kaplan, “*Din-u Devlet*,” 113-127.

一八五

(90) Copeaux, *Tarih Ders Kitabında*.

【附記】

本研究は JSPS 科研費16J05120の助成を受けたものである。

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

which had significant impact to reconstruct the political situation.

The Religious Aspects of Moral Education in Turkey during the 1970s

UENO Manami

Although both religious and moral educations have been taught in a single compulsory curriculum entitled “Religious Culture and Morals” from elementary school to high school in the Republic of Turkey since 1982, prior to that time religion and morals were taught as two different subjects, “Religion” initiated in 1949 as an elective course and “Morals” introduced in 1974 as a compulsory subject. While the research to date has investigated the Religious Culture and Morals and Religion in order to understand the religious policies of various Turkish governments, it has neglected the Morals curriculum. Therefore, the present article takes up the question of whether Morals taught religious content, in order to better understand the politics of religion and education in the history of modern Turkey. To do so, the author analyzes the political background, content and transformation of Morals education from the viewpoint of religion and the lack thereof, by utilizing periodicals published by the Ministry of National Education, the curriculum guidelines for Morals and the 1976 edition of the Morals textbook.

As Turkey experienced frequent regime change during the 1970s, every new regime altered the Morals curriculum guidelines, especially with respect to its religious aspects, ranging from teacher qualifications to course content. While the secular regimes preferred to limit religious content, the right-wing governments led by non-secularist politicians endeavored to increase it. That is to say, for all politicians at that time the issue of including religious content in moral education was an important concern. For example, the 1976 edition of the Morals textbook, which was written under a right-wing government, placed great importance on Islam, attempting repeatedly to explain the relationship between “Turkishness” and Islam. Here the intent was to persuade secularists that religious ideas were an important part of moral education.

Although the research to date has argued that the military government formed after the coup of 1980 incorporated the ideology called “Turkish-Islamic

Synthesis” into its education policy and the Religious Culture and Morals curriculum, this article shows that those same characteristics were already present in the Morals curriculum, thus demonstrating a continuity in education policy before and after the coup.